

【国語科提案】

未来に生きて働く探究力と省察性の育成

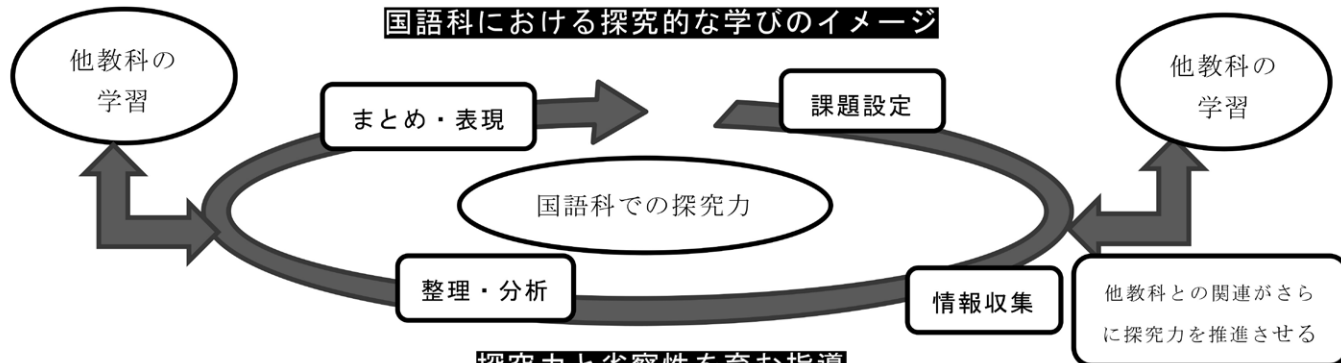
国語科の本質

国語科は、言葉による見方・考え方を働かせ、言語活動を通して、言葉の働きを適切に理解し、それらを活用表現する教科である。国語科は、様々な事象や対象の内容を自然科学や社会科学等の視点から理解することを直接の学習目的とするのではなく、様々な事象をどのように言葉で捉えて理解し、どのように言葉で表現するか、という言葉を通じた理解や表現及びそこで用いられる言葉そのものを学習対象とするという特質を有している。したがって、言葉に着目して言葉の働きを捉えるという国語科固有の視点を踏まえ、理解したり表現したりしながら自分の思いや考えを深め広げることが、国語科で育成したい力である。

国語科の目標及び育みたい探究力と省察性

国語科の目標	国語で理解し表現することを通して、①創造的・論理的思考の側面、②感性・情緒の側面、③日常生活における人との関わりの側面から言葉に対する見方・考え方を働かせ、言語感覚を養い、自分の思いや考えを形成し深める資質・能力を育成する。
育みたい探究力	創造的・論理的思考や感性・情緒を働かせて思考力や想像力を養い、日常生活における人との関わりの中で、国語を正確に理解したり適切に表現したりするとともに、新たな考えを創造する力。
育みたい省察性	テキストに書かれている言葉や自他の発言、または問題解決の過程や結果をふり振り返りながら、学級や個人の問題解決について調整したり、改善したりしながら問題解決の質を高める資質・能力。

国語科における探究的な学びのイメージ



様々な事象をどのように言葉で捉えて理解し、どのように言葉で表現するかを育むためには、実生活の場における問題を解決すべく探究する「探究力」と自らの探究を調整・改善しながら進めるための「省察性」を育む必要がある。

学習者一人一人が、その単元の学習を通して探究力を育むには、学習者の興味・関心や問題意識をふまえた学習課題を設定し、その学習課題の解決を目指して学習活動を展開することができるように単元を構想する必要がある。学習課題は、第1次で単元を通じた学習課題を設定するだけでは、学習意欲を単元終末まで自足させることはできない。導入において単元を通じた学習課題を設定したうえで学びを振り返ったり次時の学習を見通したりしながら学習を展開していくことが探究する姿につながると考えるのちの学習活動で意欲的に学ぶ仕掛けを設定し、その過程を繰り返すことで、より探究が深まると考えている。

また他教科の学習を意図的に単元に組み込むことで、学習意欲を持続させ、かつ、探究力を身に着けることで他の学習にも活用発揮させることのできる力へとつながっていくと考えている。

研究の評価

研究内容で取り組んだ授業実践の中での子どもの言葉をもとに、研究の成果と課題を明らかにしていく。その際に授業での子どもの言葉やノートの記述などの子どもの表現物を用いて研究の質的評価を行う。

【社会科提案】

未来に生きて働く探究力と省察性の育成

社会科の本質

社会科は社会認識を通して、公民的資質を育成する教科である。公民的資質の育成は社会科の究極の目標であり、国際社会に生きる民主的で平和的な国家・社会の形成者として必要な資質・能力とも言える。このような資質・能力を育成するためには、広い視野から地域社会や我が国の国土に対する理解を一層深め、国際社会で主体的に生きていくための基盤となる知を生み出すことや我が国の歴史や文化を大切にしながら、持続可能な社会の実現に向けて**よりよい社会の形成に参画する資質・能力**の基礎を培うことを重視していく必要がある。

社会科の目標及び育みたい探究力と省察性

社会科の目標	社会生活についての理解を図り、我が国の国土と歴史に対する理解と愛情を育て、国際社会に生きる平和で民主的な国家・社会の形成者としての必要な公民的資質の基礎を養う。（＝よりよい社会の形成に参画する資質・能力の育成）
育みたい探究力	社会的な見方・考え方を働かせながら、実社会に存在する課題を問題と捉え、問題解決のために様々な情報を収集し、整理分析し、仲間と共に問題解決方法を創造し、表現・発信する資質・能力。
育みたい省察性	自他の問題解決について社会的な見方・考え方を働かせながら、見通したり、振り返ったりし、学習を調整・改善しながら問題解決の質を高める資質・能力。

社会科における探究的な学びのイメージ

【社会の問題発見】

問題発見
解決の見通し
社会参画（問題解決）への意欲の喚起

【社会を考察する過程】

問題解決①
問題解決に向けて、情報を収集し、整理・分析を行う。
社会参画（問題解決）に向けて情報の収集と解決方法の追究

【社会を構想する過程】

問題解決②
問題解決に向けて、まとめ・表現・発信する。
**問題解決方法の追究
問題解決に向けた取り組みの実施**

探究力と省察性を育む指導

よりよい社会の形成に参画する資質・能力を育成するためには、社会の問題の解決に向けて社会的な見方・考え方を働かせながら問題解決を進める「探究力」と自らの問題解決を調整・改善しながら進めるための「省察性」を育む必要がある。そのためには、学習問題と単元構成の2つが特に重要であると考えられる。

まず、学習問題では、以下の3つの視点を重視し、学習問題づくりを行う。

- 子どもがこれまでに獲得した**知識を活用・発揮できる学習問題**であるか。
- 子どもが解決したいと思う学習問題**であるか。
- 社会科で育成すべき、**資質・能力の育成が図られる学習問題**であるか。

次に、単元構成では、「**社会的事象を考察する過程**」と「**社会的事象を構想する過程**」の2つを位置付けることを重視している。

「社会的事象を考察する過程」とは、社会的事象についての情報を収集し、考察することで意味や特色、傾向などについて考察し、社会的事象についての理解を深めたり、多面的な視点で捉えたりすることを行う過程である。

「社会的事象を構想する過程」とは、問題解決に向けて、自らの社会的事象へのかかわり方や問題解決の方法を創造したりして、問題解決に向けて社会に参画していく過程である。

研究の評価

取り組んだ授業実践の中での子どもの言葉をもとに、研究の成果と課題を明らかにしていく。その際に授業での子どもの言葉やノートの記事などの子どもの表現物を用いて研究の質的評価を行う。また、年度初めと年度末にアンケート調査を行い、アンケート結果による量的評価も行う。

【算数科提案】

未来に生きて働く探究力と省察性の育成

算数科の本質

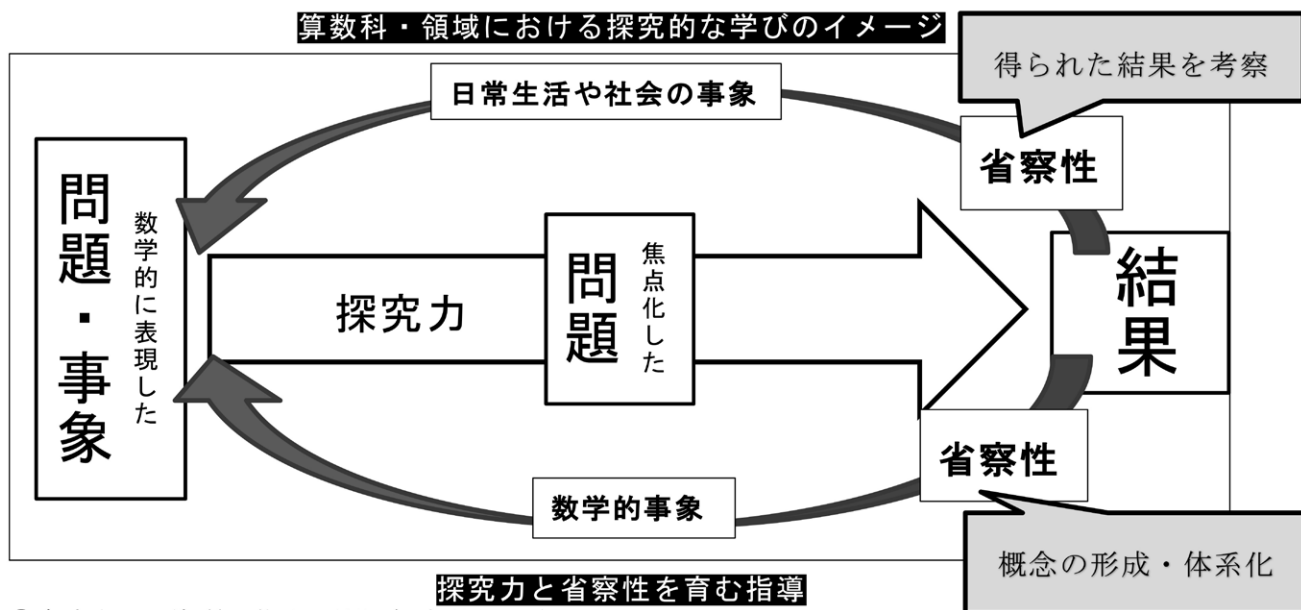
算数科は、学習内容の系統性が明確であり、それらを統合・発展させて学習していくという性質がある。数量や図形などについての基礎的・基本的な知識及び技能を確実に習得する。そして、これらを活用して、問題を解決するために必要な数学的な思考力、判断力、表現力等を育むとともに、算数の良さに気づき、算数と日常生活との関連についての理解を深め、算数を主体的に生活や学習に生かそうとしたり、問題解決の過程や結果を評価・改善しようとしたりするなど、数学的に考える資質能力を育成することが本質である。

そのため、知識・技能の形式的な確認・習得といった学習過程ではなく、事象を数理的に捉え、数学の問題を見出し、問題を自立的、協同的に解決し、解決過程を振り返って概念を形成したり体系化したりする算数科固有の問題解決過程（数学的活動）を大切にして指導する必要がある。

算数科の目標及び育みたい探究力と省察性

算数科の目標	・数学的な見方・考え方を働かせ、数学的活動を通して数学的に考える資質・能力を育成する。
育みたい探究力	・日常生活や社会の事象を数理的に捉え、数学的に表現・処理し、問題を解決する力。 ・数学的事象について統合的・発展的に捉えて新たな問題を設定し、数学的に処理し、問題を解決する力。
育みたい省察性	・問題解決過程を振り返り、得られた結果の意味を考察する。 ・問題解決過程を振り返り、概念を形成したり、体系化したりする。

算数科・領域における探究的な学びのイメージ



探究力と省察性を育む指導

① 育成すべき資質・能力と問題解決過程の確認

探究力を育むために、単元で身に付けさせたい三つの資質能力を明確化し、それを育成する問題解決過程を描くことが大切である。（どのような数学的活動によって授業を構成していくか。）

② 「見方・考え方」を生かす

省察性を育むために、問題解決によって得られた結果を、言語化したり、批判的に検討したりする「見方・考え方」を指導することが大切である。

問題解決過程の中で、「見方・考え方」を意図的・計画的に指導の中に位置づけて、指導することで、探究力と省察性を育むことができる。

研究の評価

単元で育みたい三つの資質能力を明確化し、それを育成する問題解決過程を描き指導する。単元ごとに数学的な見方・考え方を生かし、問題解決過程を描くことができたかどうかを評価していく。

未来に生きて働く探究力と省察性の育成

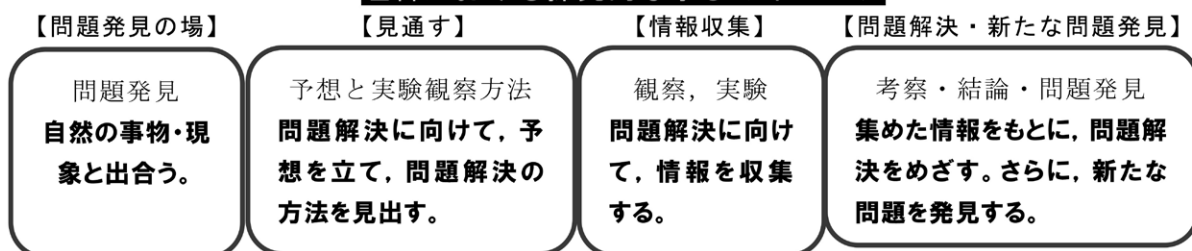
理科の本質

理科は自然の仕組みや自然の中に隠れている原理や法則性などを、科学の方法を用いて自分で見付けていく教科だということを観察や実験を通して気付かせるとともに、問題解決を探究する力を育成する教科である。解決しなければならない問題に遭遇したとき、客観的なデータに裏付けされた知識や技能を駆使して、真理にせまろうとする力は、急速に変化する世の中に生きる子どもにとって必要な資質・能力といえる。このような資質・能力を育成するためには、理科の見方・考え方を働かせて、自然にかかわり、問題を見出し、見通しをもって観察、実験を行い、より妥当な考えを導き出す過程を通して、自然の事物・現象についての問題を科学的に解決することを重視した指導が必要である。

理科の目標及び育みたい探究力と省察性

理科の目標	自然の事物・現象についての理解を図り、観察、実験などに関する基本的な技能を身に付け、見通しをもって観察、実験を行うことで、問題解決の力や自然を愛する心情や主体的に問題解決しようとする態度を養う。
育みたい探究力	自然の事物・現象に親しむ中で問題を見出し、問題解決のための方法を考え、観察や実験を行い、結果を整理分析し、仲間と共に関わり合いながらより妥当な考えを創造する資質・能力。
育みたい省察性	自ら見出した問題について見通しをもって活動したり、観察や実験の方法や結果の妥当性を検証したりすることで問題解決の質を高める資質・能力。

理科における探究的な学びのイメージ



探究力と省察性を育む指導

理科において、問題を発見し、見通しをもって問題を解決していく「探究力」と自らの探究を調整・修正しながら進めるための「省察性」を育むためには、子どもが自己調整的に進める理科授業が求められる。子どもが見通しをもって学習計画を立て、学習の状況を自ら評価し、必要に応じて学習の調整を行うことにより、自らの行動や認知を変容させることができる。具体的に授業の流れを想定すると、以下のように展開していく。

見通しをもった学習計画	仮説を協働的に立て、実験を計画する。
学習過程のモニタリング	仮説を意識した実験・観察を行い、結果を全体で共有する。
学習成果についての自己評価	実験結果と仮説の比較を協働的に行い、獲得した科学概念を表現し、合意を得る。
学習全般の調整	獲得した科学概念の構築過程を振り返り、既習概念との結びつけや次の学習課題を見出す。

参考：理科における自己調整学習（森本，2012）

以上のような過程を踏ませることで、理科における探究力と省察性を育む学びの実現に近付かせる。

次に、比較する力を育成するために、3つの比較（対象同士の比較、他者との比較、これまでの知識や経験との比較）を行う場面を意識的に取り入れる。3つの比較を取り入れることで、子どもが問題意識をもったり、自己の学びを顧みたりすることにつながり、探究への意欲が高まったり、探究を修正したりすることができるようになる。また、問題解決の過程の中で比較を基にして子どもが事象の規則性を見出していくことで、各学年で重視される理科の考え方（関連付ける、条件制御する、多面的に考える）を育むことにつながる。

研究の評価

研究内容で取り組んだ授業実践の中での子どもの言葉をもとに、研究の成果と課題を明らかにしていく。その際に授業での子どもの言葉やノートの記事などの子どもの表現物を用いて研究の質的評価を行う。また、年に3回、アンケート調査を行い、アンケート結果による量的評価も行う。

未来に生きて働く探究力と省察性の育成

生活科の本質

生活科における具体的な活動や体験は、子どもの生活の全てが対象である。実生活の中で自分自身や身近な人々、社会、自然の特徴やよさ、それらの関わり方などに気付く。そして、必要な習慣や技能を身に付け、身近な人々や社会、自然を自分との関わりで捉えようとする。その過程で、自分自身や自分の生活について考え、自ら表現し、身近な人々、社会、自然に働きかけ、意欲や自信をもって学んだり、生活を豊かにしたりするものである。

また、五感を通したリアルな活動や体験を、各教科等の内容と関連付けることで、人々・社会・自然に関わる見方・考え方を生かし、多様に表現しながら探究しようとする態度を育てることをねらいとしている。

生活科の目標及び育みたい探究力と省察性

生活科の目標	具体的な活動や体験を通して、身近な生活に関わる見方・考え方を生かし、自立し生活を豊かにしていくための資質・能力を育成する。
育みたい探究力	身近な人々・社会・自然に関わり、考え、判断し、表現することで、具体的な個別の対象に対する気付きを深める。
育みたい省察性	表現した結果から考え直すなど、思考と表現を繰り返し、改善策や願いを生む活動を通して振り返る。

生活科における探究的な学びのイメージ



探究力と省察性を育む指導

生活科の目標を達成するため、探究力と省察性の基礎を育む指導を行うには、以下の点を重視して取り組むことが重要だと考える。特に、子どもたちの生活経験が学びの対象となることから、実生活にあって現実的であることが求められる。また、気付きを表現するには様々な方法があり、子どもたちがより効果的な表現方法を選んで伝える活動を充実させたい。伝える活動には人との関わりがあり、感じ方の違いや考えの違いを認識しながら、よりよい人間性に向けての指導を意識したい。

- (1) リアルタイムかつリアルな体験：Real
- (2) 多様な表現活動の充実：Representation
- (3) 人との関わりと異質性の認識：Relationship



研究の評価

子どもが表現する過程や表現したもの、対象に向かう行動、授業における言葉、ワークシートなどの記録や振り返りを用いて研究評価を行う。主に、感じたことを表現するなど、多様な表現が増えたり、人・社会・自然に関わる表現が見られたりするなどの変化を読み取る。

【音楽科提案】

未来に生きて働く探究力と省察性の育成

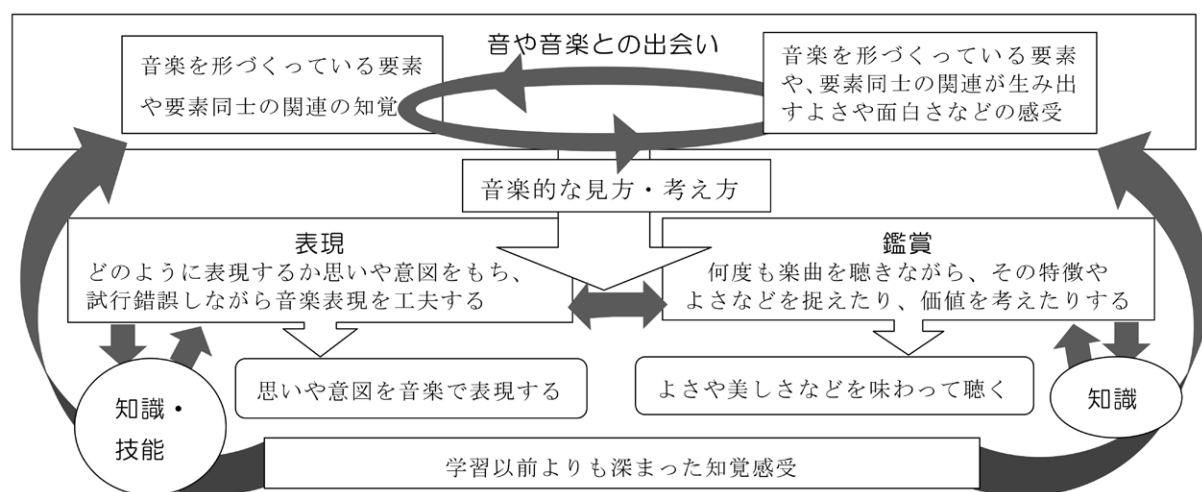
音楽科の本質

音楽科は生活や社会の中の音や音楽と豊かに関わる資質・能力を育成する教科である。この資質・能力を育成することによって、音や音楽との関わりを自ら築き、心豊かな生活を営むことのできる人を育てる。資質・能力を育成するためには、多様な音楽を幅広く体験し、音楽に対する感性を働かせ、生活や社会の音や音楽との関わりを実感できるようにする。知識と感性を同時に働かせながら、音や音楽を、音楽を形づくっている要素とその働きの視点で捉え、自己のイメージや感情を生活や文化と関連付けることを大切にして指導していく必要がある。

音楽科の目標及び育みたい探究力と省察性

音楽科の目標	表現及び鑑賞の活動を通して、音楽的な見方・考え方を働かせ、生活や社会の中の音や音楽と豊かに関わる資質・能力を育成する。
育みたい探究力	曲想と音楽の構造などとの関わりに気付き、知識や技能を得たり活用したりしながら、思いや意図をもって音楽表現を工夫したり、楽曲を味わって聴いたりする資質・能力。
育みたい省察性	音楽的な見方・考え方を働かせて自己や他者の表現や聴き方を省みることで、調整・改善したりその価値に気付いたりしながら、音楽表現や音楽鑑賞の質を高める資質・能力。

音楽科・領域における探究的な学びのイメージ



探究力と省察性を育む指導

生活や社会の中の音や音楽と豊かに関わる資質・能力を育成するためには、創意工夫をした音楽表現をすべく探究する「探究力」と自らの探究を調整・改善しながら進めるための「省察性」を育む必要がある。そのために、次の3つに重点を置いて研究を進める。

- (1) 子どもの生活や文化に密着した課題づくりや、思考したくなるしかけづくり
- (2) 振り返りの充実と、学びの実感を得られる音楽学びマップの作成
- (3) 表現と鑑賞を結び付けた題材構成

研究の評価

研究内容に基づいて取り組んだ授業実践の中での子どもの言葉や表現する音そのものをもとに、研究の成果と課題を明らかにする。授業での子どもの言葉、ワークシートへの記述、演奏等、子どもの表現物を用いて評価を行う。

未来に生きて働く探究力と省察性の育成

図画工作科の本質

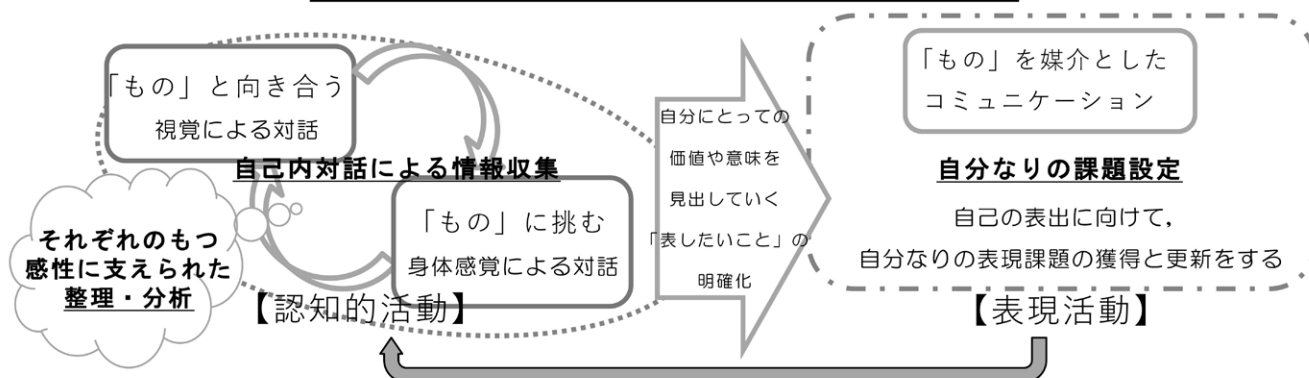
子どもは、幼い頃より感性を通して身の回りの環境と関わり、世界の認識を形成していく。図工科教育においては、取り分け、土遊びなどのような造形遊びの中では、全身の感覚を働かせた感性の教育が行われている。この造形遊びは、自発的な学びを特徴としていて、つくり出す喜びを味わうと共に、形や色を思いついたり工夫したりしながら、自分なりの表し方を見つけていく活動の中で、学びが生み出されていく。その活動の過程において、もう一度考え直したり、じっくり見直したり、周りの友達と関わったりする経験が繰り返されており、その経験の積み重ねが知識や技能となって子どもの身体に蓄積されていく。このような環境との感覚的な触れ合いを通して、自分なりの表現の課題を生み出していく中で、子どもの本来持つ造形に関する資質・能力が発揮されると共に、育っていくのである。

以上のように、図画工作科は、子どもがもつ豊かな身体感覚に支えられた感性を働かせ活動していく中で、自分にとっての意味や価値をつくり出していく資質・能力を培うことを目指している。

図画工作科の目標及び育みたい探究力と省察性

図画工作科の目標	感性を通して、環境に働きかける中で、新たな意味や価値を見出していこうとする態度を育むと共に、それらの活動の中で、発想や構想を広げながら自分なりの課題を形成する、創造性を培う。
育みたい探究力	身の回りにある「もの」に、感性的に働きかけることで豊かにイメージを膨らませたり、自分なりの意味や価値を見出したりしながら、創造的に活動していくことに喜びを見出す資質・能力。
育みたい省察性	自他の作品（制作途中を含む）の鑑賞を通して、自己が生み出したものの価値とその特質を知ると共に、他者や異文化を理解することで、創造的なコミュニケーション活動を高めていくための資質・能力。

図画工作科・領域における探究的な学びのイメージ



探究力と省察性を育む指導

創造性を育成するためには、自ら意味や価値をつくり出そうとする「探究力」と、自他の探究の特質を知ると共に、行為や活動を継続したり、更新したりするための「省察性」を育む必要がある。そして、それらは、素材や場、空間の設定と題材配列がうまく機能することで育まれると考えている。

素材や場、空間の設定に関しては、子どもの発達段階に応じた素材であること、創造的な活動を支えられる材料や用具を意図的に用意すること、子どもの創造性を支えられる空間であること、試行錯誤可能な素材や場の設定をすること、更に、活動の時間を十分に保証することが考えられる。

題材配列に関しては、子どもの興味関心に沿っていること、創造的な活動を支える知識・技能を適切に発揮・獲得しながら表現活動を進められること、形や色を媒介として自他との対話が繰り返されることに留意する必要がある。

研究の評価

形や色、イメージによる造形的な表現を媒介とした多様な関わり合いにおける、子どもの反応や表情、つぶやきなどの見取りや、子どもによって生み出され続けるかたち（活動過程の成果物）を、以下の観点で考察し、研究の成果と課題を明らかにしていく。

- ①題材の中で与えたものが、年齢に即していて、探究的な学びを支えるものであったのか。
- ②素材や場、空間は、子どもの探究的な学びにうまく機能していたのか。
- ③題材配列や題材計画は、子どもの省察性に機能し、子どもの変容を促していたか。

また、上記の観点について、活動の結果生み出されたかたち（作品）や図工カード（言語や図による記述）などを時間軸で比較し検証していくことで、研究の質的評価を行う。

【家庭科提案】

未来に生きて働く探究力と省察性の育成

家庭科の本質

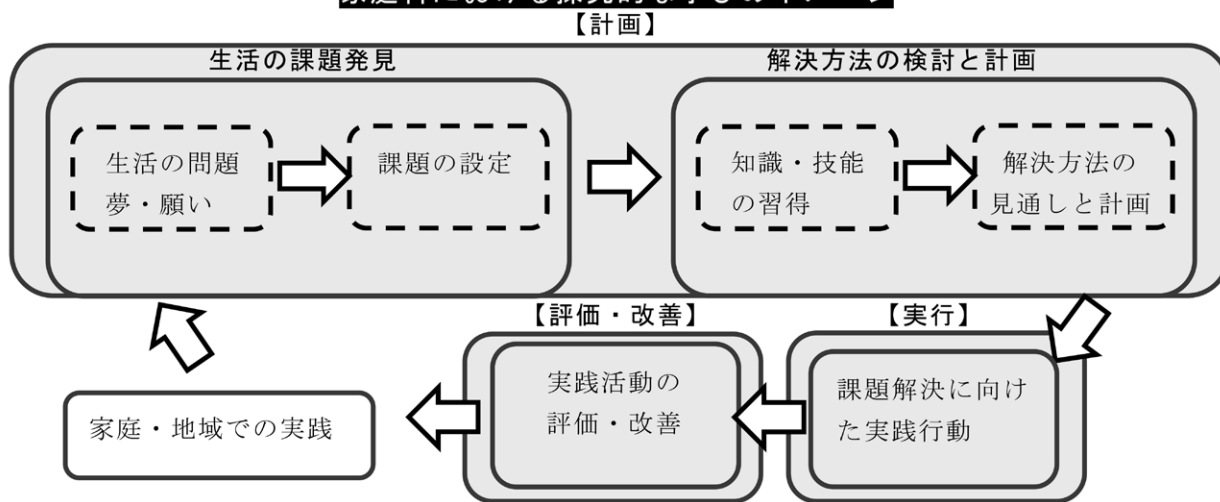
家庭科は、子ども自身が自分の生活をよりよくする力を育むことができる教科であり、生涯にわたって健康で豊かな生活を送るための自立の基礎を培う教科である。

生活をよりよくしようと工夫する資質・能力を育成するためには、生活事象を、**協力・協働、健康・快適・安全、生活文化の継承・創造、持続可能な社会の構築（家庭科的な見方・考え方）**を働かせ、衣食住などに関する実践的・体験的な活動を通して、対話的・主体的な学びを創る必要がある。

家庭科の目標及び育みたい探究力と省察性

家庭科の目標	生活の営みに係る見方・考え方を働かせ、衣食住に関する実践的・体験的な活動を通して、生活をよりよくしようと工夫する資質・能力を育成する。
育みたい探究力	日常生活の中から問題を見いだして課題を設定し、解決方法の見通しと計画を立てる力。課題解決に向けた行動を遂行する力。根拠や理由を追究していく力。
育みたい省察性	学校・家庭・地域で実践をしながら、生活をよりよくしようと工夫・評価・改善していく力。根拠や理由を分かりやすく表現する力。

家庭科における探究的な学びのイメージ



探究力と省察性を育む指導

家庭科が目指す「生活をよりよくしようと工夫する資質・能力」を育成するためには、生活事象に対する探究力と省察性を育成する必要がある。以下にその単元構成と指導の手立てを示す。

単元構成	探究力を育む指導	単元構成	省察性を育む指導
生活の課題発見	自他の共通点・相違点を見つける。	実行	多様な価値を比較・検討し、自ら選択・判断できるようにする。
解決方法の検討と計画	実習や実験、調査、観察などの活動の中で「なぜ、〇〇するのだろう」と根拠や理由について追究する。	評価・改善	自分の行動が、家族や友だち、地域・社会にどのような影響を与えているか吟味する。

研究の評価

研究内容で取り組んだ授業実践の成果と課題を明らかにするために、ワークシートを子ども自身が自分の成長を自覚できるものにし、考えの推移が目に見えるようにして研究の質的評価を行う。量的評価においても、同様にワークシートを活用する。

【体育科提案】

未来に生きて働く探究力と省察性の育成

体育科の本質

体育科は、生涯にわたって心身の健康を保持増進し豊かなスポーツライフを実現するための資質・能力を育成する教科である。この資質・能力は、「(1)その特性に応じた各種の運動の行い方及び身近な生活における健康・安全について理解するとともに、基本的な動きや技能を身に付けるようにする。(2)運動や健康についての自己の課題を見付け、その解決に向けて思考し判断するとともに、他者に伝える力を養う。(3)運動に親しむとともに健康の保持増進と体力の向上を目指し、楽しく明るい生活を営む態度を養う。」である。本校では、この3つの資質・能力を身につける＝「運動を楽しめる子」と考え、取り組んでいく。

体育科の目標及び育みたい探究力と省察性

体育科の目標	体育や保健の見方・考え方を働かせ、課題を見つけ、その解決に向けた学習過程を通して、心と体を一体として捉え、生涯にわたって心身の健康を保持増進し豊かなスポーツライフを実現するための資質・能力を育成する。
育みたい探究力	運動面 「できるようになりたい！」と運動に取り組み続ける力 健康面 健康的な心や体をつくろうとする力
育みたい省察性	運動面 どうすればできるようになったかを振り返る力 どうすればできるようになるかを考える力 健康面 自分の生活（生活習慣）を見つめ直す力

体育科における探究的な学びのイメージ

【課題を設定する】

【運動の方法や体について考える・試す】

【課題を解決する】

問題発見
課題設定

課題解決に向けて、自分の経験や活動、他者との活動から、様々な方法を探る。

「できる」方法を見つける。そして「もっと」と、さらに様々な課題に取り組む。健康的な心や体について考え続ける。

探究力と省察性を育む指導

どうすれば運動ができるようになるのかを考え、取り組む続けることが探究している姿であると考え。また、運動への探究を行い続けるためには、体の変化に目を向けることも大切である。運動を楽しむための基礎となる体をつくることにも探究できるカリキュラムを編成していく。そのために、以下の点に重点を置いて研究を進める。

- ・運動についての知識を深める：それぞれの特性を知り、背景まで理解しておく。
- ・運動にどのような思いをもっているのかを知る：アンケートや態度測定、学習カードからみとる。
- ・子ども自身が変容に気付くようなフィードバックを行う：体の動かし方や部位、またチームの戦術面などに目を向けさせる声かけの工夫。
- ・身に付けさせたい力と子どもの思いを擦り合わせた学習過程を考える：子どもがどんな思いでそれぞれの運動を学んでいくのかを考え、必要に応じて1時間ごとに修正しながら課題を考えていく。
- ・話し合いや教え合いの時間や場を大切にする：子どもたち同士で「なんでできるの？」と尋ねる、「ここをこうしたらいいんじゃない」とアドバイスをし合うような風土づくり。
- ・カリキュラムマネジメント：CHANGE、保健、生活科、家庭科、食育などをつなぎ、健康的な心や体づくりに目を向けさせる。また保護者に協力を仰ぎ、家庭での意識につなげる。

研究の評価

授業実践の中での子どもの思いをもとに、単元の中で「どのようにすれば探究力を継続させられるのか」に視点をあて、研究を振り返る。学習カードの内容と支援の方法を照らし合わせることや実際の活動の様子を映像で振り返るなどをして、単元における個や集団の変容をみていく。そこから、学習過程の工夫や声かけ、手立て等が適切であったかを判断する。また、大学との連携により、「態度測定による体育授業診断法」を用い、量的分析も行い、質的分析と両面で進めていく。

【道徳科提案】

未来に生きて働く探究力と省察性の育成

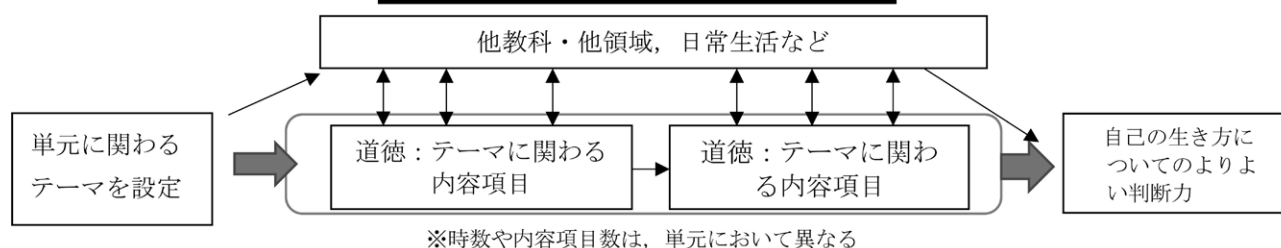
道徳科の本質

道徳科は、自己の生き方を考え、主体的な判断の下に行動し、自立した一人の人間としての他者と共によりよく生きることができるための基盤となる道徳性を養う教科である。道徳科の本質は、内面的資質を育てることである。内面的資質とは、子どもがよりよい生き方を実現していきたいという思いや願いを持ち、将来様々な場面に会った時、その状況に応じて主体的な判断に基づいて道徳的実践を行うことができることである。そのために、自分との関わりで考えること、多面的・多角的に考えることを道徳科の授業の中で大事にしていく。

道徳科の目標及び育みたい探究力と省察性

道徳科の目標	よりよく生きるための基盤となる道徳性を養うために、道徳的諸価値についての理解を基に、自己を見つめ、物事を多面的・多角的に考え、自己の生き方についての考えを深める学習を通して、道徳的な判断力、心情、実践意欲と態度を育てる。
育みたい探究力	他教科・他領域、日常生活などの体験とつなげて考えたり、自分と友達の感じ方や考え方を比べたりしながら多面的・多角的に自己のよりよい生き方について追究する資質・能力。
育みたい省察性	道徳的価値理解について自分との関わりで問い直し、自己のよりよい生き方について考えを深める資質・能力。

道徳科における探究的な学びのイメージ



探究力と省察性を育む指導

【探究力を育むために】

- ① 他教科・他領域、日常生活などと関連した単元を構成し、単元に関わるテーマを設定することで、ねらいとする道徳的価値を一人一人が自分の問題として捉え、自己のよりよい生き方について追究しようとする「探究力」につながる。また、他教科・他領域、日常生活などでの体験を道徳科で重ね合わせて考えたり、道徳科で考えたことが、他教科・他領域、日常生活などで実践したりすることがくりかえされることで自己のよりよい生き方について追究する姿につながる。
- ② 自分の考えが可視化できる手立てや、多面的・多角的に話し合うための工夫などを行うことで自己のよりよい生き方について追究する姿につながる。

【省察性を育むために】

道徳科の1時間毎と単元の途中での定期的なふりかえりを行う時間を設ける。「今のわたしはどうだろう…」「これから…」等、これまでの自分とこれからの自己のよりよい生き方について考えることができるようにする。単元の終末では、学習課題にこれからの自己の生き方についてよりよい判断力がもてるようにする。

研究の評価

研究内容で取り組んだ授業実践の中での子どもの言葉をもとに、研究の成果と課題を明らかにしていく。その際に授業での子どもの言葉やふり返りの記述などの子どもの表現物を用いて研究の質的評価を行う。また、実践意欲や態度につながったかを学校生活全般の行動の記録を適宜とったり、子ども自身が自己の成長についての振り返りを記述したりしながら、検証する。

【外国語活動提案】

未来に生きて働く探究力と省察性の育成

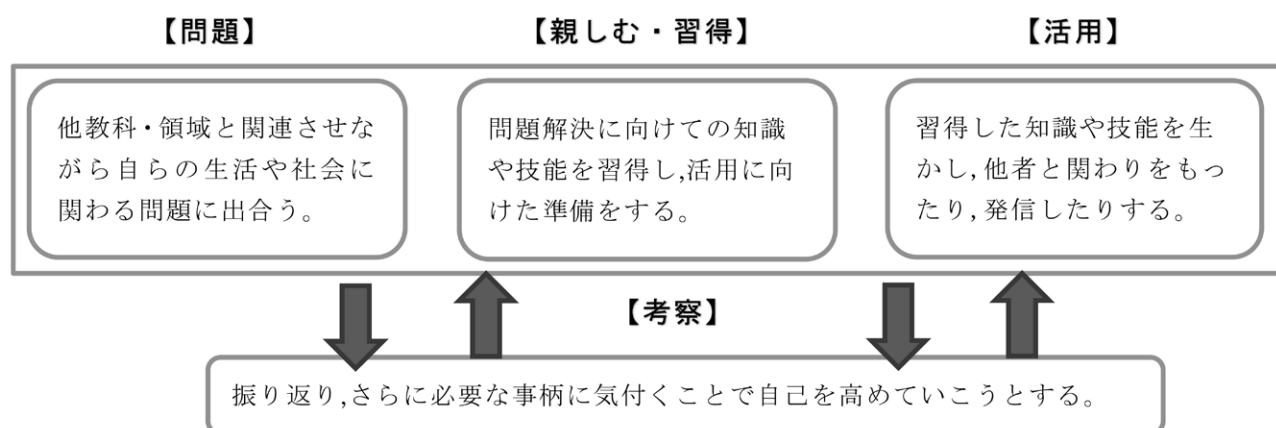
外国語活動の本質

我が国でも外国人観光客や外国人労働者の増加により、諸外国の人々の文化や言語に触れる機会が増えている。このようなグローバル化が急速に進んでいる社会において外国語をコミュニケーションの手段として使い、国際的な視野に立って活躍できる資質・能力が求められている。そのような資質・能力を育成するためには「話す・聞く」を中心としたコミュニケーションの素地を養い、互いの言語や文化を尊重する思いを育みことで未来や社会へのつながりをもつことができるようにしていくことが重要である。

外国語活動の目標及び育みたい探究力と省察性

外国語活動の目標	外国語やその背景にある文化について親しみ、体験的に理解を深めることでコミュニケーションを図る素地となる資質・能力を育成する。
育みたい探究力	日本と外国について言語や文化の違いに気付き、対象・他者との関わりを通してコミュニケーションを図ろうとする資質・能力。
育みたい省察性	自らの生活や社会に対して課題を見出し、解決策を考える中で習得した知識をさらに高めていこうとする資質・能力。

外国語活動における探究的な学びのイメージ



探究力と省察性を育む指導

外国語活動における「探究力」とは、いかに他者とコミュニケーションを図り、新しい出会いや自国との文化の違いを楽しみ世界を広げることである。そのために今の自分に必要な情報や技能について考え、語彙や表現を習得しようとする省察性が必要になる。その「探究力」と「省察性」を高め、継続していくには自分が新しく習得した言語によるコミュニケーションによって新しい自分や世界が広がったことに対する喜びが感じられる指導が重要になる。アクティビティを通したやり取りや学習したことを活用する場面を設定することで子どもたちの学びを深めていきたい。

研究の評価

主として子どもたちの成果物や児童観察、アンケート調査を行い、研究の成果と課題を明らかにする。子どもたちの成果物をファイリングし、ICT機器を用いて活動や表現を記録したものをポートフォリオとして活用し、学習前と学習後の語彙の量や表現の変化をもって評価を行う。

未来に生きて働く探究力と省察性の育成

CHANGE の本質

探究的な見方・考え方を働かせ、横断的・総合的な学習を行うことを通して、課題を解決し、自己の生き方を考えていくための資質・能力を育成する。そのために、探究的な学習過程において、課題解決に必要な知識及び技能を身に付け、課題に関わる概念を形成し、探究的な学習の良さを理解する。実社会や実生活の中から問いを見出だし、自分で課題を立て、情報を集め、整理・分析して、まとめ・表現することができるようにする。探究的な学習に主体的に・協働的に取り組むとともに友だちと互いのよさを生かしながら、積極的に社会に参画しようとする態度を養う。

CHANGE の目標及び育みたい探究力と省察性

CHANGE の目標	探究的な見方・考え方を働かせ、体験的な学びを活かした横断的・総合的な学習を行うことを通して、よりよく課題を解決し、自己の生き方を考えていくための資質・能力を育成する。
育みたい探究力	実社会や実生活の中から問いを見出だし、自分で課題を立て、情報を集め、整理・分析して、仲間と共に問題解決方法を創造し、表現・発信する資質・能力。
育みたい省察性	体験的な学びを活かした自他の問題解決の過程や結果を振り返りながら、自他の問題解決について、調整したり改善したりしながら問題解決をすることで自己の生き方を考えていく資質・能力。

CHANGE における探究的な学びのイメージ

【実社会・実生活の問題発見】

課題発見

解決への見通し
学ぶ意義や目的を明確化する。

【体験を活かした解決方法の追究】

課題解決①

課題解決に向けて、体験したり、調査したりしながら情報を収集し、整理分析を行う。

【課題解決】

問題解決②

問題解決に向けて、まとめ・表現・発信する。

探究力と省察性を育む指導

自己の生き方を考えていくための資質・能力を育成するためには、実社会・実生活の問題を解決すべく探究する「探究力」と自らの探究を調整・改善しながら進めるための「省察性」を育む必要がある。そのためには、教材分析と単元構成の2つが特に重要である。まず、教材分析では、以下の6つの視点を重視している。①子どもたちが実際に体験したり調査したりして対象に働きかけることのできる課題であるか。②他教科と関連することができ、教材のもつ価値や内容に汎用性があるか。③子どもの興味・関心に沿っているか。④継続的に繰り返し関わることができる「ひと・もの・こと」があるか。⑤子どもたちの探究的な見方・考え方の変容につながるような事実があるか。⑥自己の生き方を考えていくための資質・能力を育成することができるのか。次に、単元構成では「体験を活かした解決方法の追究」と「問題解決」の2つを位置付けることを重視している。「体験を活かした解決方法の追究」とは、問題解決に向けて体験したり調査したりして試行錯誤しながら対象に働きかけ、対象に思いを膨らませていく。その中で、情報を収集し、考察することで意味や特色、傾向などについて考察し、多面的な視点で捉えたりすることを行う過程である。「問題解決」とは、実際に問題解決に向けて取り組むことで自ら社会に関わり参画しようとする意志、社会を創造する主体としての自覚などを高め、非認知的能力が子どもの中に醸成されていく過程である。

研究の評価

研究内容で取り組んだ授業実践の中での子どもの言葉をもとに、研究の成果と課題を明らかにしていく。その際に授業での子どもの言葉やノートの記述などの子どもの表現物を用いて研究の質的評価を行う。また、年度初めと年度末にアンケート調査を行い、アンケート結果による量的評価も行う。

【複式教育提案】

未来に生きて働く探究力と省察性の育成

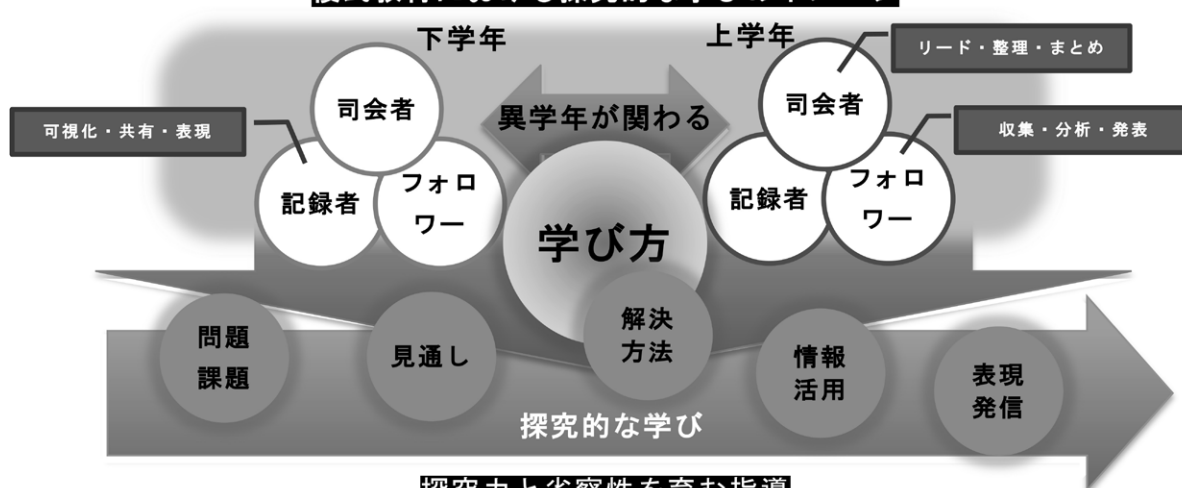
複式教育の本質

複式学級には、少人数の異学年が1つの教室で同時に学んでいるという特徴がある。異学年が互いの考えを認め合い、刺激し合うことで学びを深めることができる。しかし、1人の教師が異学年を同時に指導するため、子どもたちだけで学びを進める間接指導の時間が生まれる。この間接指導時において、司会者・記録者・フォロワーが、自分の役割を果たして学ぶことが求められる。学び方を身に付け、異学年の関わりを大切に、主体的に学びを進める子どもを育てることが複式教育の核となる。そこには、少人数のよさを生かした他者との深い関わりがある。

複式教育の目標及び育みたい探究力と省察性

複式教育の目標	司会者・記録者・フォロワーがそれぞれの役割を果たして学びを進める中で、自学自習の経験を通して自ら学び、自ら考える主体的な態度を育成する。異学年が、問題解決に向けて協働して学び合い、問題に応じた最適な解決方法を探り出していく力を養う。また、個に応じた基礎・基本の確実な定着を図る。
育みたい探究力	見通しをもち、問題解決のために最適な学び方を選択する。様々な情報を収集・整理・分析し、仲間と共に問題解決の方法を創造し、表現・発信する。
育みたい省察性	自他の問題解決の過程や結果を振り返り、問題解決の方法を調整したり、改善したりする中で問題解決の質を高める。

複式教育における探究的な学びのイメージ



探究力と省察性を育む指導

最適な問題解決の方法を他者とともに選択する力を育成するため、自分たちで問題解決するための「探究力」と、自分たちの探究を調整・改善しながら進めるための「省察性」を身に付けさせたい。そのため、「教材分析」「学び方」を柱とした。教材分析において子どもが学びたい、関わりたい、活用したいと思える学習内容を充実させる。また、学び方を系統的に示しながら、学び方の基礎を確実に身につける指導を行うことに重点を置く。

●教材分析

- 子どもの興味・関心に沿った課題や教材に学ぶ意義を感じ、見通しをもって学べる教材。
- 異学年交流による学び合いが各学年の学びを高められるようなカリキュラムマネジメント。
- 教科等や実生活と関連付けて考えられる内容で、汎用的な資質・能力の育成が図れる授業づくり。

●学び方

- 課題を設定し、取り組む内容や方向性を明確にしながら解決に向けての見通しをもつ。
- 個人でじっくり取り組み、全体で考えを共有し、多様な考えを比較しながらよさを見出す。
- 課題に対する振り返りでは、視点をもって丁寧に行うと同時に、複式学級における学び方の振り返りを行い、改善につなげる。
- 異学年の考えや意見を大切にして学び合う。

研究の評価

授業記録から、司会・記録・フォロワーや異学年の関わり方について子どもの言葉から質的評価を行うと同時に、探究のプロセスが形成されているかを評価する。